

# 平成のオロチ退治 — 斐伊川放水路事業 —

国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所

あおと せいじ

工務課長 青戸 生治

## 1. はじめに

国土交通省では島根県出雲市において、斐伊川・神戸川治水事業の一環として斐伊川放水路の建設を進めています。

斐伊川放水路は、島根県東部地域を洪水被害により苦しめてきた斐伊川および神戸川の抜本的な治水対策として進められている「斐伊川・神戸川治水計画」のうちの一つで、斐伊川を流れる洪水の一部を分流して日本海へと流す、延長約13kmに及ぶ放水路を建設するものです。

## 2. 斐伊川・神戸川の概要

島根県東部を流れる斐伊川は、中国山地の鳥取・島根県境に源を発し、途中三刀屋川や赤川などの支川を合わせながら北へ流れ、出雲平野へ出て東へ流れを変え、宍道湖・大橋川・中海を経て日本海に注ぐ、幹線流路延長153km、流域面積2,070km<sup>2</sup>の河川です。斐伊川流域は島根・鳥取両県にまたがり、県庁所在地の松江市をはじめ、出雲市、安来市、米子市、境港市など山陰地方の中核となる都市を擁しています。

神戸川は中国山地の島根・広島県境に源を発

し、途中頓原川、波多川などの支川を合わせながら北へ流れ、出雲平野で斐伊川の西隣を流れ新内藤川を合流して日本海（大社湾）へ注ぐ幹線流路延長82.4km、流域面積470km<sup>2</sup>の河川です。

斐伊川・神戸川の沿川は古くから幾度もの洪水被害に見舞われてきました。神話に登場するヤマタノオロチは毎年洪水を発生させて暴れる斐伊川を大蛇に見立てたものではないかとも言われています（図 1）。

斐伊川上流域の多くは花崗岩によって覆われ、古来より多量の土砂が流入して出雲平野が形成されてきました。このため斐伊川は、網状砂州の発達した典型的な砂河川であり、出雲平野部では河床が堤内地盤高に比べ3～4mも高い天井川となっているため、ひとたび氾濫すると被害が出雲平野一帯に及びます（写真 1）。また、斐伊川が



写真 1 出雲平野を流れる斐伊川



図 1 斐伊川・神戸川流域図



写真 2 宍道湖から大橋川・中海を望む



写真 3 平成18年7月松江市街地の浸水

流れ込む下流部の宍道湖と中海は日本海との水位差が数cm～10cm程度と小さい上、湖同士をつなぐ大橋川の川幅が狭いことから洪水の水はげが悪く、湖の水位上昇により沿岸での浸水被害が発生し、浸水は長期間に及びます（写真 2）。

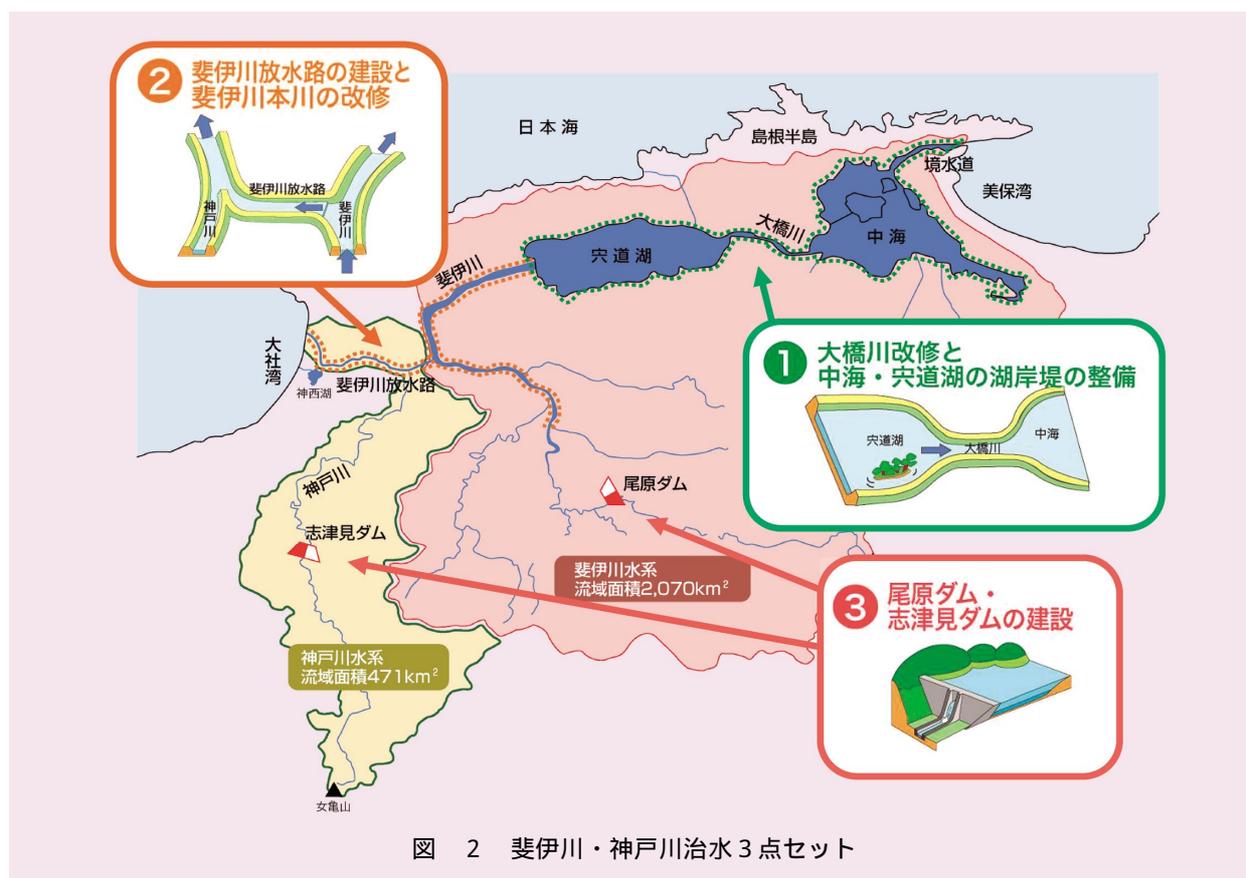
昭和47年7月の梅雨前線による豪雨では斐伊川・神戸川とも破堤寸前の危険な状態になるとともに、宍道湖の水位が上昇し、松江市や出雲平野東部の沿岸で約70km<sup>2</sup>が1週間以上にわたって浸水。約25,000戸の家屋が浸水被害を受けました。神戸川でも出雲市を中心に約21km<sup>2</sup>、約1,300戸の浸水被害が発生しました。

最近でも平成18年7月に梅雨前線により斐伊川

の灘分観測所で計画高水位を超えるなど、各所で観測以来の最高水位を記録する洪水が発生し、松江市街地を中心に2日間にわたって家屋約1,500戸が浸水する大きな被害を受けています（写真 3）。

### 3. 斐伊川・神戸川治水計画

昭和47年の洪水による大きな被害を契機として島根県は、斐伊川・神戸川の抜本的な治水対策を重要かつ緊急の課題とし、昭和50年10月「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画」を発表しま



した。この計画は、斐伊川・神戸川両水系を一体として、上流、中流、下流それぞれで発揮できる治水機能を分担し合うことで、全体として治水安全性を向上しようとするもので、

- ① 下流では大橋川の築堤や断面確保の改修を行うとともに、穴道湖・中海湖岸堤を整備し洪水を安全に流す。
- ② 中流では斐伊川放水路を建設し、斐伊川から神戸川へ洪水の一部を分流することで、下流への洪水量を減らし、斐伊川本川も洪水が安全に流れるようにする。
- ③ 上流では斐伊川に尾原ダム、神戸川に志津見ダムを建設し、下流へ流れる洪水量を調節する。

以上の三つの対策を柱とする計画です（図2）。

国土交通省（当時建設省）はこれを受けて昭和51年7月に「斐伊川水系工事実施基本計画」を改定し、三つの対策を基本とする、いわゆる「3点セット」と呼ばれる抜本的治水対策が動き始めました。この抜本的な治水対策は、人々の生活を脅

かしていたヤマタノオロチを退治した神話になぞらえ「平成のオロチ退治」と呼ばれています。

#### 4. 斐伊川放水路事業の概要

斐伊川放水路は3点セットの中流部の対策として、斐伊川が出雲平野へと流れ出る地点で斐伊川の洪水の半分近くを分流し、西側を隣接して流れている神戸川へと合流させて日本海へ流すものです。これにより、天井川となっている斐伊川下流部の洪水量を減らし、流れの悪い穴道湖の水位を下げることがあります。合わせて、斐伊川の洪水を合流することとなる神戸川下流部も、神戸川自身の洪水と斐伊川から合流させた洪水を合わせても安全に流せるよう改修します。斐伊川放水路が受け持つ流量は、斐伊川本川の計画高水流量4,500 m<sup>3</sup>/sのうち2,000 m<sup>3</sup>/sを分流させる計画としています。

斐伊川放水路の全長は13kmにも及びます。事業の区間は「開削部」と「拡幅部」に大きく分け